

異世界転生～生前の記憶あるって便利だな～

エル46

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語はまだこれから作る予定ですが、たまってきた時に小説として出します。

现阶段ではタイトルも（仮）など人の名前も（仮）ですのであしからず。

この短編小説はいわゆる「予告小説」とさせていただきます。

本編はいつ作るのかも未定ですが、何卒宜しく願います。

時は現代・・・地球であって地球ではない、この世界は科学の変わりに魔法が発達しそして、人間と異族たちが住む世界。

その世界では7つの大陸が存在する、1つ目は「グレイ・ウイン」この大陸は人間族

と妖精族が納めており、2つの王国が存在する、人間族が納める「ゴウ王国」と妖精族が納める「エーガン王国」が存在する。

2つ目は「レーガン大陸」この大陸は魔物が住んでおり荒れた大地、凶暴な魔物が生息する言わば「魔物の王国」この大地では多くの冒険者たちの墓場となっている。

3つ目は「グリーン・ウフォーカ」この大地はエルフ族とダークエルフ族が納めており、同じく2つの王国が存在する、エルフが納める「エルイ王国」とダークエルフが納める「エデン王国」が存在する。

4つ目は「魔族大陸」名の通りで魔族が納める大陸、この大陸は魔王を中心とする「レインデ王国」存在する。

6つ目は「天界」この大陸は他の大陸と違い、浮く大陸で、天使やハーピーが納めている。

7つ目は「無」昔その大陸で大戦争があつて、無くなった大陸「オーガンド大陸」

「人間族」は戦闘系、商売系を得意とする種族であり、人によつては欲が多いこともある。「妖精族」は魔法を得意とする種族であり、背は大きくても7cmしかない小さい種族である。

「エルフ族」は全てにおいて完璧である、戦闘、魔法、寿命もなく何をやっても美しく完璧にこなす万能種族である全員美男、美女である。

「ダークエルフ族」は戦闘、魔法を得意とする種族であり混血であるゆえに、エルフであってエルフではない寿命もあり完璧ではない。

「魔族」髪の毛は綺麗な赤色で戦闘を得意とする戦闘民族である外見は人間と変わらな
い特徴は赤い髪の毛と黒い翼がある戦闘はエルフの次に強い。

「天使」神様の使いで天界の一部と共に大地の上空に現れてこの世界を見守る者。

目次

プログラグ

1

プロローグ

俺の名前は黒田真！普通の高校生！俺の趣味はゲーム！ジャンルはRPG！もう17歳！友達もいないけど寂しくないZE？！

学校の帰り道、俺はそんなことを思いながら一人自電車をこいで自分の家に向かっていった。

そして俺はトラックにひかれて事故にあった……

気がつくと俺は真っ白な世界で寝ていた、何も無い空も地も何も無い世界に

「っ痛！」

頭が痛い、いや全身が痛い、俺は確か……トラックにひかれて……

大量に血を出したような……っ痛！

ひかれた時を思い出そうとすると何故か頭が痛くなる。

俺は死んだのか？いや、俺は死んでいたら意識もないよな？確か……

そんなことを思いながら何も無い世界を歩いていたら突然目の前に老人が現れた。

「うわあ！びっくりした、えっと……済みません、どこどこですか？」

俺はその老人に話しかけたらその老人は申し訳なさそうな目で

「ここは死の世界、そしてワシは天使じゃあ」

何言ってるんだこの老人？ぼけてんのか？百歩譲って死んだとしても老人が天使とか、ありえないだろ。

にしても死の世界ってなんだ？

「・・・死の世界ですか？」

俺がそう言うのと老人は深呼吸して

「そうじゃ、ここは死の世界、あなたはワシらの間違えで死んでしまった。」

は？間違え？え？あれ？

「・・・え？もしかして間違われて俺死んだの？」

俺は恐る恐るそれを聞くと老人は

「そうじゃ、済まなかった。」

そう言っつて、頭を下げた

「まじかよ、間違いつてことは元に戻るんだよね？」

俺は震えた声で聞いてみたが

「いや、もう元の世界には戻れない」

老人は申し訳なさそうな目で断言した

あれ？つてことは俺もう元の世界には戻れないの？ゲームもできないってこと？

「じゃが、ほかの世界へ転生はできる。」

俺が混乱をしていたら、老人はそう言つて鏡を出した

「え？他の世界へ転生？」

「そうじゃ、元の世界には戻れないが別の世界へなら転生できる」

まじか、つてことはまた生きれるってことか？

「ちなみに、どんな世界ですか？」

「行つてのお楽しみじゃ」

老人はニヤリと笑つてそう答えた。

行つてのお楽しみつて、教えてくれないのかよ！どうする？

他の世界へ転生するか？でもどんな世界だ？

「前世の記憶はどうなるんですか？」

「死んだのはワシらの責任じゃから、残して欲しいなら残せるぞ」

そうか、つてことは前世の記憶のまま生まれ変わるってことか！

「そうか、じゃあ前世の記憶のまま転生してください」

「いんじゃな？」

「はい・・・あ！一様聞きますが転生したら名前とかはどうなります？」

「もちろん全部変わる、別人になるからな」

そう言って老人はケラケラと笑った・・・

こいつぜって責任感じてないな！にしても別人になるか・・・この体で心残りもない
しいいかな？

「分かりました、では転生の方お願いします・・・」

そう言って俺は新しい体をあたいられて転生をした。